ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 モコットゥナシ　絵　小笠原 小夜

テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

吉村圭一郎さん(54)＝写真家・模型作家

――お住まいはどちらですか。

今は千歳市です。釧路管内弟子屈町の家系ですが、生まれは神奈川県です。小学校に上がるまでは北見市や関東にいて、札幌市、美唄市と移りました。大人になり自衛隊に入ったのですが、42歳でフリーカメラマンになりました。雑誌や広告用の写真を撮ることもあるし、個人の活動として道内の炭鉱やアイヌのふだんの暮らしも撮っています。

――模型作りの仕事もなさっているとか。

映画に登場する宇宙船や街並みなどのミニチュアを作っています。「シンゴジラ」にも私の作ったビルが映っていますよ。3カ月かけて作って、3秒でゴジラにこわされましたが。博物館に展示するジオラマなども作ります。最近はチセ（家）のペーパークラフトなど子供向けのワークショップをすることが多くなりました。

――アイヌの伝統的な文化のふきゅうに力を入れているんですね。

8年前に病気をし、アイヌ語を教えてくれたひいおばあさんや近所のお年寄りたちのことを思い出したんです。北見市の相内で、ひいおばあさんだけはカヤで造ったチセに住んでいた。家族や近所の人たちがサコロペ（英雄の話）を語ったり、おいのりしたりしているのを見ていたから、もう一度大事にしたいなと。

それから、ひいおばあさんが作ってくれたアイヌの着物を毎日着るようになったんです。ただ、着物で歩くと良い反応ばかりじゃない。人とすれちがう時に舌打ちや悪口が聞こえたりすると、アイヌの中にもいやがる人がいます。それはやっぱりアイヌとして生きることがこわいからでしょうね。着物を着ているだけで悪く言われるんですから。アイヌとしてやりたいことをするのが普通である。そういう世の中になると良いなと思います。

◇

このコーナーでは、さまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

伝統文化ふきゅうさせたい

タンペ エエラム アン？

「きみ、これ知ってる？」の意味

■スンク

エゾマツはアイヌ語でスンクと呼ばれるマツ科の常緑樹です。枝がたれ下がったようにのび、北海道の木にも指定されています。この木のにおいは病気を追いはらうと考えられ、薬としても使われました。風邪を引いた時には葉をなべでにて、そのしるを衣服につけてかおりを吸いこみます。傷口に松ヤニをぬることもありました。

また、矢のえの部分や、トンコリなどの楽器の材料としても使います。木の皮は、屋根やかべをおおう材料として使われ、根は曲げ物（板などを曲げて作った器）をとじ合わせるのに利用されます。

木などの植物にもカムイが宿っているとされ、樺太ではエゾマツは男性の神、トドマツは女性の神だと言い伝えられてきました。トドマツは枝が上向きに生えます。エゾマツと見分けられるかどうか、試してみましょう。

（泉洋輔・札幌大学ウレシパクラブ4年生）

いつの間にか立っていた大きなスンク。カムイたちは上にいる美しい女性に会おうと頑張るが…

創世神とケソラプ

＝オホーツク管内美幌町の話

（「知里真志保フィールドノート＜5＞」より）

ネウサラ おはなし

語りながら 聞きながら

住コロ 又コロ

私はエトゥピロマ　キナラトンカ　オヤイチンカラクル（創世神―世界を作った神）です。ある時こんなうわさが聞こえてきました。私が作ったこのアイヌモシリ（人間の世界）の上手に、いつのころからか、大きな銀のスンク（エゾマツ）が立っているのだとか。そのスンクの上に、レタラ　ケソラプという、美しい斑点模様のついた羽を持つ神の鳥が巣を作って、2羽のポン　ケソラプ（ヒナ）を育てているといいます。

ヒナたちは人の姿をしている時はたいそう美しいむすめなので、あちこちのチャンカムイ（力の弱い神）たちが、結婚したいと思ってスンクのまわりに集まって登り始めたそうです。すると、スンクの上の方から強い風がふき下ろしてきて、最初に登ったチャンカムイは足をふみはずし、まっさかさまに落ちて死んでしまいました。ほかのチャンカムイも挑戦してみますが、やはり同じように落ちてしまいます。あちこちのチャンカムイが次々といどんでいくのですが、登りきる者はだれもいません。このままではアイヌモシリを守るカムイたちがいなくなってしまうのではないか、という話でした。

ある日のこと、私がいつものように宝物の刀のさやに彫刻をしていると、沖の方からシレプンカムイ（偉大な海の沖の神）のやってくる音が聞こえました。そして、私のチャシ（城）の屋根に降り立つと、こう言いました。「エトゥピロマ　キナラトンカ　オヤイチンカラクルよ、あなたが作ったこの世界の上手にレタラ　ケソラプが陣取って、そのむすめと結婚しようとするカムイたちが挑戦しては、次々と死んでいく。村が途絶えようとしているという話を私は聞いた。かれらに代わって、私がケソラプのむすめと結婚しようと海からやってきたのだ。一緒に行って、むすめを手に入れないか」

私はそれを聞きましたが、知らぬふりをしていました。私が返事をしないのでカムイは行ってしまいました。やがて夜6日、昼6日が過ぎたころ、世界の上手からあのカムイが木から落ちて死ぬ音が聞こえてきました。

私は「あのカムイも放っておいたら死んでしまったようだ。どれ、行って様子を見るか」とつぶやいて、夜6日、昼6日かけて立ち上がりました。それから夜6日、昼6日かけて着物を着、夜6日、昼6日かけて帯をしました。夜6日、昼6日かけて外に出て、夜6日、昼6日かけて出かけていきました。

創世神がなんなく木に登り、ケソラプの子をなでると、むすめの姿に

見ると、聞いたとおりに銀のスンクが立っています。その下にはたくさんのカムイの白い骨が積み重なっていて、その中にシレプンカムイの骨もありました。私がそれを手でこすると、元の姿にもどって生き返り、座ってねむそうに目をこすりました。ほかのカムイたちもそのように助けてから、私はスンクに登り始めました。すると木の上から突風がふき下ろしてきたので、幹の裏へ表へ回りこんでかわしながら、どんどん登りました。とうとう一番上に着くと、巣の中でレタラ　ケソラプがこう言いました。「偉大なカムイの首領よ、私はあなたの世界にきて子供を持ちました。あちこちのチャンカムイがむすめを欲しがるけれど、満足いく者がいないので息をふきかけて落としてやりました。あなたには私のむすめをあたえるから、姉をシレプンカムイの妻に、妹の方をあなたの妻になさい。私も位のある神だから、ばっするとしても刀ではきらないで」

そこで私は、刀をさやのままぬいて強く打つと、ケソラプのたましいがすさまじい音を立てて飛び去りました。残ったヒナを私がさすると若いむすめになったので、上のむすめをシレプンカムイの妻に、下のむすめを私の妻にしました。

うわさを聞き、海の沖の方からさそいに来たシレプンカムイ

行動が優雅な神ほど立派

このお話はサコラウ（神謡）の一つです。世界を作った、とても長い名前のカムイが主人公です。オアイヌオルシクル（その後ろに人間が続いた者）とも呼ばれ、人間の先祖だと言われています。ほかの地域では、サマイェクルやアイヌラックルと呼ばれる神と同じだとも言われます。

アイヌ民族の物語では、立派な神様ほどゆっくりと優雅に行動することになっています。何をするにも昼6日、夜6日をかける。気が遠くなるほどゆったりした動きですね。しかし、このペースに合わせられずせっかちにふるまってしまうと、「たいしたことのない神」と言われてしまいます。

ケソラプは、伝説上の美しい鳥で位の高い神ですが、このお話の中では神様たちを殺してしまったので、ばつを受けることになりました。しかし刃物できられなければ、もう一度天界に復活できると言われます。